

千葉大学国際教養学部 学位記伝達式式辞

令和 2 年 (2020 年)3 月 23 日

本日ここに学士の学位を取得し、卒業を迎えられたみなさんに、国際教養学部の教職員を代表して心よりお祝いを申し上げます。また、みなさんの成長を見守り、応援してこられたご家族や関係者のみなさまにも深甚なる敬意を表します。新型コロナウイルスの影響で、千葉大学全体の卒業式は中止となり、またご家族や関係者のみなさまにもご列席いただく機会を逸したことは誠に残念であります。しかしながら、本日、学位記授与式を挙行することによって、ささやかながらもお祝いの場を設けさせていただくことになりました。

みなさんは、平成 28 年 (2016 年)4 月に、千葉大学では 41 年ぶりに創設された新学部である国際教養学部に入學されました。いまだ、内容も定かとは言えず、先輩もいない学部で第一期生として飛び込まれたみなさんの勇気と期待に、あらためて心から敬意と感謝の念をあらわしたいと思います。

さて、みなさんが一年次の最初に受講した授業に「国際教養学入門」という名の少人数の導入ゼミがありました。また、本日みなさんが受け取られた学位記 (卒業証書) にも、学位の名称として「学士 (国際教養学)」という文字が刻まれています。いったい「国際教養学」という学問分野は存在するのか、また、教養に国際とそうでないものがあるのか、といった疑問を持たれたことがあると思います。また、いまでもそのような疑問をお持ちかもしれません。以下に私個人の理解を述べさせていただきます。

この学部の英語名称は College of Liberal Arts and Sciences となっており、「国際」を表わす単語は入っていません。これは教養というのは普遍的なものであって、国際的な教養やナショナルな教養があるわけではない、という考えにもとづくものです。本学部のメジャーの一つである「グローバル・スタディーズ」は、あらゆるナショナルな偏見を打破し、地球規模の課題に取り組もうという意図で名付けたものでした。また、「現代日本学」というメジャーは、「日本的」なものをただ称揚するためではなく、批判的に「日本」を考えるとともに、自分の足元から世界を考えようという意図をもって作りました。これは、スウェーデンの作家スヴェン・リンドクヴィストの「君自身の足元を掘れ」という言葉に触発されたものです。また、「総合科学」というメジャーは、文系・理

系といった、おそらく日本に特有の因習的な二分法をどうにかして克服したいと考えてのものです。課題の認識から出発する本学部の学びでは、こうした二分法は不要で、総合性が目指すべき方向だと考えました。

この学部を設置する過程においては、学術的専門性に欠けているのではないか、という内外の批判がありました。また、みなさんの中にもそういう批判にさらされた経験のある方もおられると思います。しかし、学術的専門性が特定の分野についての単なる実用的な知識ということであれば、そのような知識はすぐに古びたものとなるでしょう。私の経験でも、「役に立つ」知識というものはすぐに役立たなくなります。しかし、私たち教員は、みなさんが多様で複合的な学問分野について、単なる知識ではなく理解を深め、そうしたさまざまな学問分野の方法を見極め、それらを統合する力を身につけることができるよう、教育にたずさわってきたつもりです。ですから、みなさんが自分の学びの経験を思い起こすなら、今後みなさんが社会において直面する課題を理解し、それを解決していく方法を見出すことにつながると私は確信しています。その意味で、私は自信をもって、みなさんを社会に送り出すことができます。

みなさんなら、いま新型コロナウイルスをめぐって目の前で展開している諸課題にどう取り組むでしょうか。危機的な状況にあるからこそ、人間の生存と安全をどう保障するのか、多様性を保持しながら、偏見にさらされている人びとをどのように守るのか、諸科学はどう協働して危機に立ち向かうことができるのか、科学的なものの見方をいかに貫くのか、といった切実な課題がみなさんひとりひとりに突き付けられています。あらためて、人間は大きな自然の一部であることを認識し、社会の一員として私たちがなすべきことを考え続ける必要があります。ポルトガルの作家ジョゼ・サラマーゴが1995年に発表した小説『白の闇』は、原因不明の疫病によって、人びとの視界が突然真っ白になり失明していくという、混乱した世界と人間の価値が試される状況を描いています。これは、現在の事態を考える素材に満ちた重要な書であると思います。そのエピグラフには、次のような「訓戒の書」からの引用が掲げられています。

見えるなら、よく見よ。

よく見えるなら、じっと見よ。

If you can see, look.

If you can look, observe.

「見る」というのはもちろん、心の眼、心眼のことを言っているのです。みなさんには、この状況をしっかりと見極めていただきたい。そして、このような事態がふたたびみたび起きるときに、どう生きていくかを考えていただきたいのです。

また、言うまでもありませんが、みなさんの学びの過程は多くの人びとによって支えられてきました。この学部が形をなすにあたっては、創設準備室の方々が長く困難な作業に取り組んでくれました。発足後の本学部の最大の特徴でもあり、皆さんの相談に、親身に、そして献身的に対応して下さったのは SULA の方々です。みなさんの学習を直接支えてくれたのは学務係の方々です。また、縁の下の力持ちとしてみなさんの学習環境を作ってくれたのは総務係の方々です。多くの職員の方々に、ここで心から感謝の意を表したいと思います。

みなさんが入学したい前から 4 年前、入学手続きのさいに受けとった『履修案内』には、冒頭に私が書いた挨拶文が付されていました。その末尾の文章を覚えているでしょうか。そこにはこうあります。

国際教養学部は新しい学部です。歴史はありませんが、未来があります。みなさんの力と教職員の力を合わせて、これから新しい価値や文化を創造していくことができるよう、心から期待しています。

総合校舎 1 号館の 101 大教室、その隣の小さな 102, 103 セミナー室で始まったみなさんの学びは、翌年によく完成したこの国際教養学部棟においてさらに展開されることになりました。みなさんは、長く、厳しい研鑽を積み、その成果は最終的にメジャープロジェクトとして実を結びました。みなさんは確実にこの学部の 4 年間の歴史をつくってきたのです。その学びは、千葉大学という総合大学において、また国際教養学部という、特色ある、これもまた総合的な学部において展開したものです。そのことはこれからもぜひ忘れずにいていただきたい。みなさんが、そうした総合性を生かし、自らの力でこれから作り出す社会において第一線で活躍することを期待しています。そうした活躍を通じて、確実に新しい価値や文化の創造が実現していくことでしょう。

簡潔な結語として申し上げれば、みなさんこそが歴史であり、新しい価値であり、文化に他ならないのです。

以上をもちまして、私からのお祝いの言葉とさせていただきます。本日は誠におめでとうございます。

千葉大学国際教養学部長 小澤 弘明